

『タンポポ』

1985年／日本／伊丹十三監督作品

食と人間への愛が込められた
ユーモアあふれる娯楽映画

会員 和田 恵 (60期)

『タンポポ』
価 格：4,935円(税込)
発売元：ジェネオン・ユニバ
ーサル・エンターテイメント



観終わった後に無性にラーメンが食べたくなる、シンプルだけどとても独創的で、そして、とにかく楽しい映画である。

タンクローリーの運転手ゴロー（山崎努）とガン（渡辺謙）は、偶然、未亡人タンポポ（宮本信子）が営む、さびれたラーメン屋に立ち寄る。タンポポは、ゴローとその仲間たちの協力を得て、試行錯誤を繰り返しながら、町一番のラーメン屋を目指す。物語は、西部劇仕立てで、ユーモアを交えて進む。

映画には、本編とは一見関係のない、食にまつわるたくさんのエピソードが織り込まれている。どれもおもしろくて、際立っている。特に印象的だったのは、臨終間際の妻に向かって、夫（井川比佐志）が「かあちゃん、飯を作れ！」と言った途端に、妻が布団からよろよろと立ち上がって台所に行き、チャーハンを作って、一言「出来たよ…」というシーン。妻は、子供たちがおいしそうにチャーハンを食べるのを見届けると、うっすらと笑

顔を浮かべて、コトリと床に倒れて看取られるのである。

この映画は、人間の根源的な欲求である食欲をテーマにしている。日常的に繰り返される食という営為が、とても愛おしく感じられる、と書いたら、少し大げさだろうか。

そして、映画に出てくるラーメンや、その他の食べ物以上に魅力的なのが、個性的な登場人物たちだ。映画では、人と人とのやりとりが生き生きと描かれている。中でも、映画の終盤、タンポポたちの努力が実り、ラーメン屋「タンポポ」が行列のできる店に生まれ変わった時、ゴローの仲間の1人であるビスケン（安岡力也）が、ゴローに「やったな、おれたち」と言うシーンは、すがすがしさと共に余韻が残る。

この映画には、今は亡き伊丹十三監督の、食と人間への愛が込められている。そして、きっと観終わった後に、家族や友人、大切な人と食卓を囲みたくなる、そんな映画である。